

**Greetings****東京大学退任のご挨拶と今後の CBEL Report について**

赤林朗 \*

読者の皆様、お元気でしょうか？ 早いもので、CBEL Report が創刊されてから 5 年弱が経ちました。私は、2023 年 3 月 31 日を以って、東京大学教授を退任いたします。皆様本当に長い間お世話になりました。

この 5 年間に、CBEL Report は大きく飛躍いたしました。順調に Vol.6 まで公刊でき、現在は、医中誌、J-Stage、J-GLOBAL、メディカルオンライン、Google Scholar にインデックスされており、PubMed にも申請中で、まもなく認可されると思います。

また、投稿数も大幅に増加し、日本の生命倫理学の重鎮の先生方や若手研究者、外国からの投稿も増えてきました。現在は、日本語、英語だけでなく、多言語の論文も、英訳と日本語訳をつけてくだされば、掲載する方向で検討しております。

また、評判がよかったのは、招待論文 (Invited Article) の充実化です。このカテゴリーには学生による論文も含まれます。東京大学医学部ではエレクトティブ・クラークシップ (選択実習) として 1~3 か月程度、集中して研究室で実際の研究に触れる取り組みがなされています。そこでの研究を学生が論文にして CBEL Report に投稿します。また、健康総合科学科などの卒業論文、公衆衛生大学院の課題研究を課されている学生も CBEL Report への投稿をします。人生で初めて自分の論文が雑誌

に載る、という体験はものすごく教育効果があるようです。もちろん他大学の学生さんの投稿も歓迎です。

CBEL Report は、私がこれまでの経験から、学術雑誌に求められる要件を熟考し、理想を追い求めて実現したものです。電子ジャーナルの特徴を活かし、随時の投稿、査読、掲載を迅速におこなっています。商業ベースではないので査読料、掲載料をいただいてません。それにもかかわらず、これまで私が培った人脈を活かして Original Article は、豪華な Editorial Board 陣による peer-review があります。

皆さんへの重要なお知らせとしては、2019 年 4 月 1 日、東京大学生命倫理連携研究機構 (BICRO) という、東京大学のほぼ全学部が参画する、学部相当の組織が作られ、私が初代機構長として推進してきました (<https://BICRO.u-tokyo.ac.jp/>)。現在、生命倫理は、ゲノム編集、AI、遺伝子操作食品等、もはや、医療系学部だけではカバーできず、全学部、そして国民の英知を集合させないと、将来に向けた地に足が着いた議論ができません。CBEL という理念は、この機構の一部へと移行し (決して CBEL がなくなったわけではありません)、この CBEL Report も 2023 年 4 月 1 日より、BICRO の公的機関紙に移行します。またアジア最大の生命倫

---

\* Director, CBEL and BICRO

東京大学大学院医学系研究科 医療倫理学分野、ニューヨーク大学医学部・医療倫理分野

理の Reference Center（図書館）も BICRO の一部になります。医療系だけではなく、より多くの専門分野からの投稿を受け入れ、より学際的な議論の場として発展して行ってもらいたいと思います。2023年4月1日より、BICRO の機構長は、現副機構長の中澤栄輔に交代いたします。同時に、CBEL Report の Editor-in-Chief は中澤栄輔となり、宇田川誠は引き続き、Associate Editor を務めます。私は Founding Editor として残ります。以下に創刊号に書いた挨拶を再掲します。

### CBEL Report 創刊に際して

CBEL (Center for Biomedical Ethics and Law)、日本語名：生命・医療倫理教育研究センターは2003年に東京に設立されました。アジアで初の生命倫理・医療倫理の拠点です。CBEL は、設立当初より、生命倫理・医療倫理の本質でもある「学際性」を重んじてきました。私が、多様なバックグラウンドを持った CBEL スタッフに呼びかけたモットーは、「一つのテーブルを囲んで、一つの同じトピックについて、異なる分野の人たちにも理解できる言葉で議論をしよう」につきます。

そのモットーの源になったのは、ちょうど私が1993年、世界初の生命倫理の拠点として1969年に米国・ニューヨークに設立されたヘイスティングス・センターで客員研究員をしていた時、センターのスタッフの議論に参加させていただいた時の経験です。多分野の研究者らが、互いに理解可能な言葉を用い、展開される議論のありかたは、ただただ、美しかったです。

ここまで書けばお気づきの方もおられるかもしれませんが、CBEL Report は、実は The Hastings Center Report 日本語版を目指して創刊さ

れております。日本語・英語のオンライン・ジャーナルです。

CBEL Report の特徴はいくつかあります。第一に、日本の研究者にとって、これまで生命倫理に特化した論文を発表できる媒体は、『生命倫理』（日本生命倫理学会誌）以外にほとんどありませんでした。私が日本生命倫理学会誌の編集委員長をしていたときに、年1回発行の限られたスペース故に、どうしても不採択にせざるをえない、未完成ではあるけれど、大きな可能性を秘めた論文が多くありました。CBEL Report は、そのような論文を積極的に掲載していきます。第二に、研究論文 (Regular Article) と招待論文 (Invited Article) の枠を設けました。研究論文は通常の査読 (ピア・レビュー) を行いますが、招待論文は編集長と編集委員の裁量で掲載します。萌芽的な、挑戦的な、可能性のある論文を積極的に掲載していきたいと思います。第三に、翻訳論文 (Translated Article) の枠を作りました。これは他言語の論文を、日本語に翻訳し掲載するという一方向的なものではなく、日本語で書かれた論文も英訳し掲載します。日本での多くの議論の蓄積があるにも関わらず、それが世界へ発信されていないのが現状だと思います。日本から世界に発信し、グローバルな生命倫理研究の発展に微力でも貢献できたら、という思いが私にはあります。

学術誌の質は、投稿者の皆様の貢献無くしては上がるものではありません。創刊の趣旨に賛同される国内外の研究者からの多くの投稿を期待しております。

2018年8月

CBEL Director

赤林朗

創刊時より、この方針は何も変わりはありません。

CBEL は学際的な研究と海外発信にも大変熱心で、つい最近の2つの成功事例を紹介しましょう。

## 1) ワクチン接種における、日本人の利他性に関する研究

当教室のOGである、駒田、李、渡辺先生との共同研究で、ワクチン接種における日本人の利他性についての研究論文を2022年12月13日に公開しました [1]。この論文は健康調査の2次データを使用した探索的疫学調査で緻密な統計解析を行っています。倫理とどこが関係あるのか、と思われる方も多いと思います。次のEditorialに細述していますので是非読んでみてください。CBELは新たな学術創成の場にもなることの証明です。

査読者、編集者は、1点突破でこの論文を評価しアクセプトしました。また、日本語の新聞記事(毎日新聞2023年1月16日夕刊)や英文サイトの編集者が面白いとのことで、英語版にも載せていただきました。

<https://mainichi.jp/english/articles/20230124/p2a/00m/0sc/017000c>

何と素晴らしい文理融合の研究ではないでしょうか！

## 2) 『せいかいがかぜをひいたから』

非常勤講師で、全学のGlobal Bioethicsの講義を担当していただいている当教室で学位論文を書いた高橋しづこ先生の著作(絵本)です。彼女は、女性、3児の母親、妻、育児、産婦人科医、研究者、活動家としての多数の役割をこなしています。『せいかいがかぜをひいたから』は、高橋先生が育児の中で、感じた子供へのコロナウイルスの説明に苦勞する親を自身で体験し、なんとか絵本でわかり

やすいものと考え、書かれたものです。彼女は、アメリカの大学ではリベラルアーツ専攻で、絵画が大変得意でした(大学の間は絵ばかりかいていたと伺っています)。読者諸氏は、何も言わず、TBSの江藤アナの朗読(7分)を聞いてみてください。『せいかいがかぜをひいたから』朗読:江藤愛アナウンサー【TBS】YouTube (<https://www.youtube.com/watch?v=SNk5flfMiKo>) (英語字幕: CBEL ReportのHP Twitterの部分の<https://youtu.be/4Y3R09AEkBE>にアップロード)そして、絵本をゆっくり味わって読んでください。"The World Caught a Cold" by Shizuko Takahashi M.D. (yale.edu) ([https://elischolar.library.yale.edu/yicb\\_childrensbooks/1/](https://elischolar.library.yale.edu/yicb_childrensbooks/1/)) お気づきの様に、Yale大学の協力で、日本原著以外に、世界14か国に翻訳されており、全て無料で入手できます。(上述のサイト)

アラビア語(2億3500万人) ベンガル語(2億6000万人) マンダリン(標準中国語)(13億9000万人) ドイツ語(1億3000万人) フランス語(1億2300万人) イタリア語(6000万人) 日本語(1億2500万人) 韓国語(8000万人) ポルトガル語(2億5000万人) ルーマニア語(2600万人) ロシア語(1億8000万人) スペイン語(5億7700万人) ウクライナ語(4500万人) Urdu語(6100万人); **翻訳語話者総数 35億4200万人(世界総人口の44.3%!)**

私が、一番心をうたれたのは、ロシア語とウクライナ語に翻訳されていることです。両国の母親たちは、インターネットにさえアクセスすればこの本を無料でよむことができるのです。戦争やっている場合でしょうか? 私は、この本を、両国の母親・子供たち(そして戦争を勧めている方たち)が読んで、一刻も早い戦争終結を願うものです。私はここに高橋先生の平和主義者としての真髓を

見て取るのです。

倫理と絵画、なんと奇遇な遭遇ではないでしょうか。CBEL 以外では起きえない現象です。今、彼女は、2023 年の内閣府による女性チャレンジ賞にノミネートされています。

最後にご報告と宣伝です。『入門・医療倫理 I』(勁草書房、2005、改定版 2017)、『入門・医療倫理 II』(勁草書房、2007)、『入門・医療倫理学 III：公衆衛生倫理』(勁草書房、2015) を公刊しましたが、大変好評です。さらに、医療分野だけでなく幅広く倫理学の基礎を学んでいただきたく、入門シリーズの理論の章のみを集めた本(いわゆるスピノフ)として『入門・倫理学』(勁草書房、2018) を出版しましたが、好評なようで 5 刷までいきました。驚くべきは、『ケースブック医療倫理』(医学書院、2002) は、20 年たってもいまだに改定無しで売れ続けています。27 刷りです。出版社の方からはオバケ本と呼ばれているようです。そして翻訳本としては、ジョンセンらの『臨床倫理学』(新興医学出版、1997 年 3 版、2006 年 5 版) が、四分割表として広く受け入れられ、よき友人でもあったジョンセンが亡くなる前に約束してくれた第 9 版 (McGraw-Hill LANGE, 2021) が出版され、それを同じく新興医学出版より今年中には翻訳出版する予定です。そこでは、四分割表のできた歴史も紹介したいと思います。なお、私は英文単著として、*Bioethics Across the Globe: Rebirthing Bioethics* (Springer Nature, 2020) を公刊しました。これは、オープンアクセスにしておりますので、Google でタイトルを入力していただければ、無料で全文よめます。アマゾンでペーパーバックを注文するとかなり高額かかります。ですがオープンアクセスですので、なんと 2021 年は 20,000 回世界中でダウンロードされて、その世界地図をみると、さら

に何と、アフリカ、南米、西アジアの国々でもよまれています。是非ワン・クリックして、おもしろそうであれば購入してください。そして、私の東大現役最後に、まだタイトルは正式に決まっていますが、新興医学出版より、『学生さんのための医療倫理学(予定)』という本当に手軽な、超々入門書を今年中に出版できると思います。これから医学生になる、当教室研究生の一戸櫻子さんにご協力いただいております。この本は実に面白いです。是非楽しみにしていただければ幸いです。

それではどうぞ今後も CBEL Report をご愛読くださいますようお願い申し上げます。皆様のご多幸を祈念しております。

2023 年 3 月吉日

赤林 朗

Director, CBEL and BICRO

- [1] Komada TM, Lee JS, Watanabe E, Nakazawa E, Mori K, Akabayashi A. Factors of influenza vaccine inoculation and non-inoculation behavior of community-dwelling residents in Japan: Suggestions for vaccine policy and public health ethics after COVID-19. *Vaccine*: X 13: 2023  
doi: 10.1016/j.jvacx.2022.100245.